

◆三田評論と昭和一〇〇年

入塾志望の諸君へ

今年も亦、多数の卒業生を送ると同時に、新塾生を迎える時期が到来した。数千のわれわれの同志が日本の指導者層にふえたということは、寔に悦びに堪えないところであるが、それに続いてまた数千の後輩を迎えることが出来るということは、われわれをして将来に対して大きな期待を抱かしめるものがある。

本塾を志望される諸君は、すでに色々の機会に、福澤先生や慶應義塾のことを多少ながら学び知って居られることとは思ふが、本塾を志願される以上、慶應義塾がどんな学校かということは、一応承知しておいて戴きたい。

「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」という言葉は、毎週ラジオで放送されているから、大抵の人は知っていることと思うが、それは福澤先生の言葉で、「学

潮田江次
(塾長)

問のすゝめ」の冒頭に出ているのである。即ちこれが本塾の精神であつて、慶應義塾は創立九十四年自由民主の学校として終始して来ているのである。封建の遺風や権力政治の習性が根強くはびこっていた日本に於て、独り慶應義塾では民主精神が全く自然の裡に日常当然のこととして実践され、かくして一世紀近くに及んでいるのである。それ故に、這般の戦争の結果、わが国が民主国家として再建されなければならなくなつても、本塾では何事も変更する必要がないのである。否な慶應義塾のより建てて来た精神が、そのまま戦後わが国教育の根本精神に採り入れられているのである。

戦時中の規律訓練になれた者が塾に入つたときには、何というだらしない学校だと思つたそうである。事実われ

われの時代に於ても、地方から上京して慶應義塾に入学してみると、まるで纏りのない学校だという感じをもったものである。

ところが戦後になって、三田に來た学生のうちには、却って慶應義塾を保守的なところだと思つた者があつたそうである。というのは、戦後のわが国社会は周知のように、甚だ無軌道な且つ乱雑な様態を示しているのであるから、そこから自然の規律をもつた塾に入つてみると、何となく固い、がつちりしたところだと感ずるであらうからである。或は諸君のうちにも、そうした感じを抱く者があるかも知れない。しかしそこに厳然とした塾風が存しているのである。

世間自体が、ちぢこまつたり、或は行き過ぎたりしている間に、慶應義塾では一世紀に亘り變ることなく、伸び伸びと自由民主の精神を實踐し、不動の規律が自ら生まれているのである。

塾には、自由を珍しがつて、無暗に物をこわしたり、人に突つかつたりする者はいない。独立自尊いやしくも外に對して己れの權威を輕んずることをしないと同時に、無礼の言を吐き、無作法に振舞つて得意になるような者は、塾にはいないのである。師弟朋友何のこだわりもなく物を言い語り論じ、しかも互に礼儀を失わず、作法あり、相和し相親んで一家を成すのが塾風なのである。

塾では、大学生となると、紳士としてこれを取扱うのが自然の原則となつてゐる。だから事こまかに干渉がましいことはしないが、しかしこれは学生諸君が勝手氣儘な振舞をしてよいというのではなく、自らの行動には自ら責任をもてということである。そうした氣概をもつて学問、文化活動、スポーツ等に精進出来るような、生き生きとした青年諸君に入塾して戴きたいと思う。

今年の志願者は愈々激増し、恐らく九十四、五%の方々はその志望を達し得ないことになるだらうと思う。このことは、われわれの最も遺憾とするところであるが、また致し方のないところでもある。仮令入塾出来なかつたとしても、われわれのモットーとするところは、民主日本にとつて大切なことであると確信するのであるから、今後の研究實踐を期待して止まない次第である。

【一九五二（昭和二十七年）二月号（五五二号）掲載】

（潮田は塾長（一九四七—一九五六）。戦後復興に尽力する。本稿では、戦前、戦後と時勢に流されない慶應義塾の塾風を示す。『三田評論』は長い休刊期間を経て一九五一（昭和二十六）年十月に五五〇号として復刊。掲載号は復刊三号に当たる。）